漢書に記された罽賓の政争

定 方 晟

漢書に罽賓^{かい}国王烏頭勞と容屈王子陰末赴の記事がある。この二人物とインド古銭学で知られる王との比定により、西紀前1世紀の西北インドの失われた歴史の一部を回復しようとする試みが早くからおこなわれた (Tarn, pp. 339-343 参照)。この比定にはアゼス王の年代も関連するが、ターンはアゼスの年代を 30 B. C. ごろとみなした (do., p. 349)。マーシャルはアゼス紀元をヴィクラマ紀元 (57 B. C. 開始) と同一視する説の提唱者であるが、かれがその手がかりとした刻文の “136 ayasa” という表現には王名 ayasa に称号が伴っていなかったため、かれはこの紀元がアゼスの即位に始まるものとはみず、アゼスは 57 B. C. より後に即位したと考えた。かれはいう、アゼスは東パンジャブ征服の際にマトラー文化と接触し、すでにその地で行なわれていたヴィクラマ紀元を採用したのであろう、と (Marshall, p. 53)。ラモットはアゼスの在位期間を 38-10 としている (Lamotte, p. 506)。ところが、最近 “(sam) 63 maharayasa ayasa atidasa” (故大王アゼスの 63 年) なる句をもつ刻文の存在が知られ¹⁾、早い時期の “アゼス紀元” には称号が伴っていたことが判明し、アゼス紀元はヴィクラマ紀元にほかならないことと、それがアゼスの即位に始まったことが確実視されるに至った。アゼスの年代が確定したいま²⁾、漢書の記事を再検討すべき時がきているように思われる。

漢書卷九十六西域云 (罽賓国の条) の当該記事は次のとおりである。(武帝がはじめて罽賓に通じて以来、絶遠の地ゆえ漢兵も来ることができまいとみずから思っ、その王烏頭勞はしばしば漢の使者をおびやかし殺した。烏頭勞が死に、子が代わって立つと、使者をつかわして貢物を献じさせた。漢は関都尉文忠にその使者を送らせた。王はまた忠を害しようとしたが、忠はこれを覚り、そこで容屈王の子陰末赴と共謀して、罽賓を攻め、その王を殺すと、陰末赴を立てて罽賓王とし、これに印綬を授けた。その後、軍候趙徳が罽賓に使いしたところ、陰末赴と仲たがいし、そのため陰末赴は長い鎖で徳を縛り、副使以下七十余人を殺し、そのうえで使者をつかわし上書してわびた。孝元帝はそこが絶遠の域であるため事を取りあげず、その使者を鼎度国に放逐し、絶って交通しなかった。成帝のとき、罽賓はまた使者をつかわし貢物を献じて罪をわびた。漢が使者をつかわし返

礼としてかの使者を送りどけようとすると、杜欽は大將軍王鳳に説いて言った。「さきの罽賓王陰末赴はもと漢が立てた王であるのに、のちついに反逆しました。(以下、杜欽の言葉は省略。そこでは、罽賓の人の信用しがたいこと、罽賓への交通の危険なことが強調され、漢の使者を送ることの無意味さが説かれている。)」そこで鳳はこれを言上して欽のことばに従った。罽賓国は実は賞賜と交易とを利得するものであって、その使者は数年に一回来たという。(小竹文夫訳「漢書」下巻、筑摩書房、昭和54年、340-341ページ)

問題の二人物のうち、「烏頭勞」は Wylie によって貨幣銘の adelphou (GK. “brother”, sg. Gen.) に、「陰末赴」は Von Gutschmid によって Hermaeus に比定された (Marshall, p. 48)³⁾。Karlgren による二人の漢字名の中古音 (“Ancient Chinese”) は

烏頭勞 *uo-d'əu-lâu* (GS. 61a, 118e, 1135a)

陰末赴 *ĩəm-muāt-p'ĩu* (GS. 651y, 277a, 1210i)

であり、一方、漢書の上記の記事が該当する西紀前1世紀のインドの硬貨⁴⁾に現われる王名と称号は次ぎのとおりである。前者を後者のなかに探れば、やはり Wylie らの結論のようになるであろう。

【王名】 Epander, Dionysius, Zoilus, Apollophanes, Artemidorus, Antimachus, Philoxenus, Nicias, Hippostratus, Amyntas, Hermaeus, Ranjabula (Raju), Maues, Azes, Azilises, Vonones, Spalaphores, Spalagadames, Spaliris, Spalyrises, Indravarman, Aspavarman, Liaka kusuluka, Patika, Ranjubula

【称号】 nikephoros, apadihata, basileus, nikator, jayadhara, soter, maharaja, tradata, mahata(ka), jayamta, apratihatacakra, chatrapa, mahachatrpa, rajadiraja, rajaraja, dhrami(ka), putra, stratega, maharajabhata, -bhraha, adelphos

なお、記事にあるもう一つの音訳語「容屈」(*ĩwong-k'ĩuət*: GS. 1187a, 496k) は *yonaka-kumāra* (ギリシャ人の王子) のような言葉を訳したものと思われる⁵⁾。

さて、*adelphos* (sg. Nom.) の称号をもった人物は古銭学では二人知られている。この二人を解明するのに必要な硬貨を以下に五個あげる。(a は表, b は裏)

I a BASILEŌS BASILEŌN MEGALOU ONŌNOU

b maharaja bhata dhramikasa śpalahorasa (Gardner, Pl. xxi, 7)

II a BASILEŌS BASILEŌN MEGALOU ONŌNOU

b śpalahoraputrasa dhramiasa śpalagadamasas (do., Pl. xxi, 10)

III a SPALURIOS DIKAIUO ADELPHOU TOU BASILEŌS

- b śpalahoraputrāsa dhramiāsa śpalagadama (do., Pl. xxi, 12)
 Va BASILEŌS ADELPHOU SPALIRISOU
 b maharaja bhraha dhramiāsa śpaliriśasa (do., Pl. xxii, 1)
 Va BASILEŌS MEGALOU SPALIRISOU
 b maharajasa mahatakasa ayasa (do., Pl. xxii, 3)

これによって次のことが分かる。まず I と II から、「王の王、偉大なる Vonones」に仕える二人の人物、śpalahora と śpalagadama がいたということ、II b, III b から、この二人の人物は父子であるということ、I b, III a からは、Spalyris と śpalahora は、その発音上の類似と称号 bhrata および adelphos の意味上の一一致とから、同一人物であるらしいこと、すなわち、硬貨 III は Spalyris (śpalahora) とその子 Spalagadames の共同発行の硬貨であるらしいこと、I a によって、Spalyris が「兄弟 (adelphos, bhrata)」と称するのは「Vonones の兄弟」の意であるらしいこと、IV によって、adelphos と呼ばれた人物はもう一人いる (Spalirises) こと、V によって、この人物と Azes (II?) は父子らしいこと、等がわかる。

この二人の adelphos のうち、どちらが漢書の「烏頭勞」であろうか。これを決めるには、支配者の年代的順序が問題になってくる。パキスタンやアフガニスタンから発見されたサカ・パフラヴァ時代硬貨のなかに互いに密接に結びつく一群の硬貨——(Marshall のいう Arachosian mint シリーズ, Marshall, p. 49)——がある。Gardner はそれらの硬貨をその著に表 I のような順序で配列した。(王の名はギリシャ名を主として示し、カローシュティ名もある場合には、それを補う。*印のギリシャ名はカローシュティ名からの復元で、実際の硬貨にはこの表記はない。)

表 I Azes(aya)

Azilises(ayiliṣa)
 Vonones
 *Spalahores(śpalahora)
 *Spalagadames(śpalagadama)
 Spalyris
 Spalirises(śpaliriśa)

表 II Vonones

Spalahores(=Spalyris)
 Spalagadames
 Spalirises
 Azes I
 Azilises
 Azes II

そして、Gardner は解説 (p. xliii) で、Azes の子が Azilises, Vonones, Spalahores, Spalyris, Spalirises であり、孫が Spalagadames であるという推測を示している。ラプソンもほぼ同じ順序を考えたが、Spalyris を Spalahores と同一視し、Spalirises と連名の Azes (上記 Vb の aya-) を Azes II とみなした (Rapson, pp. 514-

518)。かれらの考える順序には理由があるように思われる。なぜなら、Gardner の著でみると、表 III に示すように (Nicias の硬貨を考慮外とする)、Spalagadames の硬貨以来ギリシャ文字の Σ (シグマ) が $\square$ という形で示され、 Ω (オメガ) が ω で示されるようになり、これが Spalirises と (ラブソンによる) Azes (II) の時代まで続き、さらにのちの Gondophares や Abdagases にまで続いているからである。それに対し、 $\square$ や ω を持たぬ大量の “Azes” の硬貨があり、この Azes が Azes I と考えられ、問題の人物群の筆頭 (表 I 参照) に置かれるのである⁶⁾。

表 III

	シグマ オメガ			シグマ オメガ	
	Σ	Ω		Σ	Ω
Amyntas			Vonones-Spalagadames	Σ	Ω
Nicias	$\square$	ω	Spalirises-Spalagadames	$\square$	ω
Hippostratus	Σ	Ω	Spalirises	$\square$	ω
Maues	Σ	Ω	Spalirises-Azes	$\square$	ω
Hermaeus	Σ	Ω	Gondophares	$\square$	C Ω ω III
Azes	Σ	Ω	Abdagases	$\square$	C ω
Azilises	Σ	Ω	Orthagnes		C
Azilises-Azes	Σ	Ω	Pacores		C
Vonones-Spalahores	Σ	Ω	Zeionises		C

ところが、ターンやマーシャルは表 II のような順序を考え、ラモットもこれに従っている (Lamotte, p. 504f.)。これは Azes (=Azes I) Azilises の位置と Vonones, Spalahores, Spalagadames, Spalirises の位置を逆にしたものである。マーシャルの説明では、このほうが硬貨の図案の変遷が合理的に理解できるといふ。すなわち、これらの支配者の銀貨には、ある特定の刻印者の手になるとみられる独特の Zeus 描写が見られるが、Azilises のには見られない。表 I の順序によれば、この独特の描写が途中で一時的に消えることになり、その理由を説明するうまい方法がない。しかし、表 II の順序によれば、問題の刻印者が Azes I 在位の途中で死んだと考えることによって説明がつく。

しかし、表 II の順序には、他方で重大な疑問が生じる。なぜ Spalagadames, Spalirises, Azes II の硬貨に $\square$ と ω が現われるのに、途中の Azes I と Azilises には現われないのか。これは「独特の Zeus 描写」の有無より一層重大な疑問を提起しよう。Azilises の硬貨にのみ Zeus の独特の描写が欠如していることについては、Azilises はたまたまその図案を採用しなかったが、かれ以後の王たちはその図案に魅せられたのだと考えることができる。これに対し、Azes I と Azilises

の大量の硬貨に□とωがひとつも現われない事実は簡単には解釈できそうもない。表Iの順序は依然として念頭におかすべきであろう。

さて、Azēs Iの在位年数は、かれの硬貨の量の多さや、かれの紀年が死後も継続されるほどの重みをもった事実から、30年(すなわち27 B.C.まで)くらいと考えたい。一方、漢書によれば、烏頭勞の子の敗死は遅くとも元帝の中期(40 B.C.ごろ)の事件である。したがって、漢書の烏頭勞はAzēs I以後の人物ではありえない。つまり、表Iによれば、Spalirisesではありえない。表IIによっても、Spalirisesではありえない。なぜなら、かれの子はAzēs Iとなっているが、Azēs Iは殺されるどころか、27 B.C.ごろまで生きているからである。(Spalirisesに他の子があり、それが殺されたとすれば、話は別。)

そこでSpalaphoresを考えてみよう。表Iによれば、かれの年代はやはり遅すぎる。表IIによれば、かれが烏頭勞である可能性はあり、その子の敗死事件が起こったのはAzēs I即位(57 B.C.)の直前ということになる。しかし、表Iについては、もしSpalaphores父子がAzēs Iと同時期に別の土地を支配していたと考えれば、年代上の難点は解決される。この場合、かれらが仕えたVononesなる人物⁷⁾、少なくとも上記III aの「王」(TOU BASILEŌS)と称する人物はAzēs Iにはかならないと考えるべきである。この同一視は唐突にみえるかもしれないが、Mithradates I, Vonones, Mauesの三者を同一人物視するDobbinsのアイデアを借りたものである(Dobbins, p. 52)。

一方、漢書の記事によってどれだけのことが年代的に確定できるだろうか。皇帝の在位年代は一応の目安になる。関都尉文忠、軍候趙徳、杜欽、大將軍王鳳のうち、文忠、趙徳については、漢書に他に言及がないが、杜欽(杜周伝第三十)と王鳳(元后伝第六十八)は、成帝の重臣として詳しく言及されている。なかんずく王鳳については、成帝即位(33 B.C.)とともに大將軍となり、陽朔三年(22 B.C.)秋八月に死んだ(成帝紀第十)との記事がある。関都尉、軍候の職名は秦の時代からみられるから⁸⁾、ここでの年代決定には役立たない。

年代の確定的な二人物(Azēs Iと王鳳)をパルティア朝と漢朝の系譜に並べて下に示そう。漢書記述の関係の一連の事件⁹⁾(陰末赴の鬲賓王殺害、趙徳の捕縛、成帝への使者の派遣)は王鳳の時代を下限とするから、HermaeusとAzēs Iは時代的にはほぼ重なることがわかる。ちなみに、DobbinsはOrodes IIをAzēs Iと同一視する(Dobbins, p. 46.)。

Mithradates II (124-87)		武帝 (141-87)
Sanatruces (76-69)		昭帝 (87-74)
Phraates III (69-60)		宣帝 (74-49)
Orodes II (56-37)	Azes I (57-)	元帝 (49-33)
Phraates IV (37-2)	王鳳 (33-22)	成帝 (33-7)

以上の結果をふまえ、表 II の統治順序にもとづき、一つの推測をおこなってよう。65 B.C. ごろ、ガンダーラ¹⁰⁾に Spalahores がいて、しばしば漢の使者を殺した。60 B.C. ごろ、Spalagadames が父を継ぎ、漢に(関係改善のための?) 使者を派遣した。その使者に随伴して来た文忠をかれは殺そうとした。当時、ギリシヤ人の王子 Hermaeus がサカ族(あるいはパフラヴァ族?) の進出のためにカピシヤに後退し、反撃の機会をうかがっていた。文忠はかれのもとに走り、かれと手を結んで、Spalagadames を攻め滅ぼした。Hermaeus はガンダーラの王になったが、漢のつぎの使者趙徳を縛り、その部下を殺した。40 B.C. ごろ、Hermaeus は元帝に謝罪の使者を送ったが、元帝は取りあわなかった。57 B.C. に即位した Azes I はタクシラを根拠地として次第に勢力を拡大した(Azes の硬貨にかれより西方の Heliocles の硬貨の図案と、東方の Apollodotos の硬貨の図案が見られるのはかれの勢力拡張の様子を示す。) 30 B.C. ごろ、Hermaeus はふたたびカピシヤに後退していた。かつての王子はすでに老いていた。かれは漢に新帝が立ったことをきくと、助力を期待してふたたび謝罪の使者を送った。(成帝のとき使者を送ったのが Hermaeus であるとは断定できないが、そうである可能性は大きい。「前罽賓王陰末赴」という表現は、Hermaeus がガンダーラの支配権を喪失し、まだ生きている様子を想像させる。)

すでにみたように、表 I において Spalahores 父子の時代と Azes I の時代を重ねるならば、次のように考えられる。父子は初めは Vonones に仕え、後には(Vonones=Azes I とすれば初めから) Azes I に仕え、ガンダーラ地方を支配していた。Hermaeus は Spalagadames を殺し、ガンダーラを獲得したが、Azes I の反撃によって後退し(Azes I が即位時に Seistan 方面にいたか、タクシラにいたか、等は不明)、Spalirises によって最後の根拠地カピシヤを奪われた。Spalirises は Hermaeus の硬貨の特徴である Zeus 像を自分の硬貨に表わし、いまや自分がカピシヤの支配者であることを誇示した。Spalagadames が殺されたのは 45 B.C. ごろであるが、かれの硬貨には Azes I のにも見られない □ と ω が早々と登場した、と。

ジャイナ教の「カーラカーチャーリヤ物語」のヴィクラマ紀元の起源伝説についていえば、この伝説が含む歴史的実事はおそらく次の二つのこと、すなわち

サカ族のシンド・アヴァンティ地方への侵入と、そのサカ族がアゼスによって征圧(ないし統合)されたことであると考えたい。歴史の記憶がおぼろげになったとき、インド人の心を喜ばせる想像は、侵入者サカを征圧したのはインド人の王であり、Vikramāditya と呼ばれるにふさわしい英雄であるということであったにちがいない。

(引用文献)

P. Gardner: The Coins of the Greek and Scythic Kings of Bactria and India in the British Museum, 1886. **E. J. Rapson**, (ed.); The Cambridge History of India, vol. I, 1921. (Second Indian reprint 1962). **S. Konow**: Kharosthi Inscriptions (CII, II-ii), 1929. **W. W. Tarn**: The Greeks in Bactria and India, 1938, (Reprint 1966). **Sir John Marshall**: Taxila, vol. I, 1951, (Indian reprint 1975). **E. Lamotte**: Histoire du Bouddhisme Indien, 1958. **K. W. Dobbins**: Vonones, Maues and Hermaios, the Imperial Coinage of Mithradates II, East and West 30, 1980.

- 1) **H. W. Bailey**: Two Kharosthi Casket Inscriptions from Avaca, JRAS, 1978. **B. N. Mukherjee**: An Interesting Kharosthi Inscription, JAIH 11, 1978. **A. D. H. Bivar**: The Azes Era and the Indravarma Casket, South Asian Archaeology, 1979. **G. Fussman**: Nouvelles Inscriptions Śaka: Ère d'Eukratide, Ère d'Azès, Ère Vikrama, Ère de Kaniška, BEFEO, 1980. **R. Salomon**: The "Avaca" Inscription and the Origin of the Vikrama Era, JAOS 102-1, 1982. **H. W. Bailey**: Two Kharosthi Inscriptions, JRAS, 1982.

上記6論文のうち第4と第6にはそれぞれ下記のように、本文のとは別の刻文が紹介され、この種の証拠は三つとなった。“74 maharayasa mahatasa ayasa purvakalisa (Baileyによれば vurtakalisa)” “77 maharajasa ayasa vurtakalasa”。

- 2) アゼス紀元はアゼスの戦勝を記念することから始まったという考えもあるが (Bivar, p. 376)、即位の年に始まった可能性のほうが大きいだろう。Mukherjee (p. 110) や Salomon (p. 67) はアゼス紀元はアゼス即位に始まると考えている。
- 3) Herrmann は陰末赴を amurgios に (Konow, p. xxv), Dobbins (p. 44) は鳥頭券を Vonones (Wanand) に, Lassen は Gondophares (Tarn, p. 340, n. 1) に比定した。
- 4) 漢書には「罽賓では」金銀をもって錢となす、文に騎馬を為り、幕には人面を為る」という記事もあるが、この記述によく対応する硬貨は Eukratides, Philoxenus, Hippostratus, Hermaeus-Calliope のそれである。アゼスの騎馬像と神像をもつ。
- 5) Von Gutschmid は容屈を yonaki (ギリシャ人の都市) に (Tarn, p. 340), Dobbins (p. 45) は Evukratidasa に比定した。
- 6) パルティアで□が現われるのは Mithradates III (56-55) のときからで, Orodes II (55-38) の治世の後半にはそれが恒常的になるという (Tarn, p. 327)。□ (四角

(36)

漢書に記された罽賓の政争 (定 方)

いオミクロン)が見られるのは3世紀以来のアテネやスサの刻文においてであり、Orodes II の硬貨にはそれが恒常的に見られるという (Tarn, p. 326)。このことにより、ラプソンはそのインドにおける出現を40 B. C. ごろとした (Rapson, p. 572)。

- 7) Vonones は一般に Seistan 地方にいた Suren 家 (パルティア王朝の親藩) の一人と考えられている。
- 8) Von Gutschmid は関都尉職の最初の設置の年を59 B. C. としているらしい (Tarn, p. 337)。
- 9) 資治通鑑ではこの出来事は河平4年 (25 B. C.) の条にいれられている。恐らく「このあたり」という推測にもとづいてのことであろう。
- 10) この時代の罽賓の位置について多くの説がある。わたしはこれをガンダーラに比定するアジア歴史事典の説 (榎一雄氏稿“罽賓”) に賛成する。カシミールは当時まだ重きをなさず、カーブルやカピシヤは Hermaeus 等の勢力下にあったと思われるからである。西洋の学者には罽賓をカーブルに比定する人が多い。しかし、漢書 (大月氏国の条) は大月氏と罽賓を別記し、しかも大月氏の支配下に高附をおく。後漢書 (大月氏国の条) では「貴霜翽侯が高附 (カーブル) を取り、また漢達、罽賓を滅ぼした」、「高附は天竺、罽賓、安息が代わる代わる取った」といっているから、高附と罽賓は別ものである。

(東海大学教授)